

ハイダ語の連体修飾構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024967

ハイダ語の連体修飾構造

堀 博文

1. 序

本稿は、ハイダ語¹の修飾部と被修飾部からなる連体修飾構造の概略を述べるとともに、ハイダ語においていくつかある連体修飾構造のタイプを統一的に捉えるために修飾部を「疑似的名詞節」と見做し、ハイダ語の連体修飾構造にみられる修飾と被修飾の関係は「疑似的名詞節」と名詞が並置されることによって生じるという解釈を示すことを目的とする。

2. ハイダ語の連体修飾の基本構造

最初に修飾部が最も単純に1語だけからなる場合の例をあげる²。以下の例において、[] は連体修飾構造、また、太字は主要部 head (すなわち被修飾部) を示す。

¹ ハイダ語Haidaは、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸のハイダ・グワイ Haida Gwaii (旧名:クイーン・シャーロット諸島)とアメリカ合衆国アラスカ州南東部で話される系統不明の言語である。本稿で取り上げるのは、南部方言に属するスキドゲイト Skidegate 方言 (ハイダ・グワイ) である。

² ハイダ語の例は、1行目に音素表記に形態素境界を加えたもの、2行目にグロス、3行目に英語の訳を付して示す。グロスにおいて [] で示されているのは、形態音韻的な変容によって2つの形態素の間の境界が不分明になっているものである。また、動詞に付したグロスのうち、スモールキャピタルで示したものは類別接頭辞と手段接頭辞のどちらか一方あるいは両方を必要とする拘束語根である。グロスで用いた略号の一覧は、本稿末尾を参照されたい。以下にあげる例のうち、出典が明示されていないものは筆者が直接あるいは間接的にハイダ語話者から得たものである (話者 [イニシャルのみ] の一覧は本稿末尾に示しておいた)。

- (1) [dəws st'i] ʔə=qiiχa-gən.
 cat be.sick I=find-PAST
 'I found a sick cat.'
- (2) [ʔwaadχa+naay k'ájuu] Ø=gu ʔiijin.
 sell+house be.small at be[PAST]
 'There was a small store at (that place (=Ø)).'
- (3) [χa gaydən] ʔə=xidxiidən.
 dog run[PAST] I=chase[PAST]
 'I chased a running dog.'
- (4) taanuud=gyaan [ciinaay sguga-s] hayluu-s=gyaan
 in.the.fall the.fish go.up.river-NONPAST disappear-NONPAST=when
 χaw-gaay sq'asgiidən.
 fish-NMLZ be.closed[PAST]
 'In the fall, when fish going up the creek (to hatch) disappeared, the fishing was over.'

これらの例はすべて1項動詞であり³、被修飾語となる主要部が連体修飾構造の先頭に現われ、修飾語がそれに続くという配列順序であるように見える。多くの場合において、主要部が修飾部の前に現われる傾向にあるが、実際には、次の例のように、修飾部が節である場合では、主要部が必ずしも連体修飾構造の先頭に現われるとは限らない。

- (5) [dii jaasga dii=gi ciina ʔinagwaay ʔisda-siŋ-gən]=k'yaawga
 my sister me=to fish half give-promise-PAST=for
 ʔə=gəd+q'əw-ʔu.
 I=wait+sit-SG
 'I sat down and waited for the half of fish that my sister promised to give me.'

³ ハイダ語ではいわゆる「形容詞」は独立した語類ではなく、動詞の下位範疇に入ると考えられる((1), (2) など参照) (堀2006)。

- (6) gəm=ʔəsəŋ [naagaay=ga qaaxul+naay ʔisis]
 NEG=too the.house=in defecate+room be[NONPAST]
 'lə=gyaagiq-guda-gəŋ.
 3=use-want-NEG
 'He did not want to use the toilet which was in the house.'
- (7) 'laa='uu [ɽupət=gan 'laana ʔaaxanaa-s]=gu nəŋ
 3=FOC Rupert=for land be.close-NONPAST=at INDF
 t'ə=tləguʔgaayaa-gəŋ.
 3PL=make[EVD]-PAST
 'They made one at a place which was near Prince Rupert.'
- (8) haay, kilsdlaay ʔqin, [ʔaaj=xwa dəŋ qaaga-ləŋ na-xaŋ-s]=ʔa
 OK sir dear over.there your uncle-PL live-PL-NONPAST=IMP
 qiq-ga.
 see-on.foot
 'Now, dear chief, go see your uncles living over there.' (Swanton 1905: 29
 [Enrico 1995: 112])
- (9) … ['laa=ʔad gyaagwaan qiigawaa-s]=gi
 3=with animal have.been.born-NONPAST=to
 'la kyaagəŋ-xidaa-gəŋ.
 3 call-INCEP[EVD]-PAST
 '… he called upon the animals which had been born with him.' (Swanton
 1905: 45)

これらの例あるいは他の例からも明らかのように、まず、ハイダ語には、主要部と修飾部の関係を表わす標識（例えば、英語の関係代名詞に相当する要素）がない。更に、ハイダ語の連体修飾構造は、主要部が修飾部の中から切り離されず、その位置のままであることから、主要部内在型であることが分かる。実際、例えば、(5)の連体修飾節は、下記の通り、そのままの語順で単独の文として用いられ得る。

- (5') dii jaasga dii=gi ciina ʔinaawaay ʔisda-siq-gəŋ.
 my sister me=to fish half give-promise-PAST
 'My sister promised to give me the half of fish.'

しばしば指摘されるように（例えば, Basilico 1996), このような主要部内在型の連体修飾節をもつ言語においては, 主要部がそれとして明示されないために, 文脈がなければ, 時として曖昧な文を生み出すことがある。例えば,

- (10) [nəŋ jaada-s dəwjaay qiŋ-gən] haana-gən.
 INDF be.female-NONPAST the.cat see-PAST be.pretty-PAST
 (a) ‘The woman who saw the cat was pretty.’
 (b) ‘The cat which the woman saw was pretty.’
 cf. nəŋ jaada-s dəwjaay qiŋ-gən. ‘The woman saw the cat.’

(a) は *nəŋ jaadas* ‘the woman (= the one who was female)’ を主要部とした解釈, 一方 (b) は *dəwjaay* ‘the cat’ を主要部とした解釈である。この例における動詞 *qiŋ* ‘see’ の主語と目的語には文法関係を標示する格標識がなく, 両者の関係はそれらの語の配列順序によって示される。このような曖昧性が生じるような連体修飾節については 5.1 で詳述する。

一方, Enrico (2003: 566) によれば, ハイダ語には, 主要部外在型の連体修飾構造もみられる。下記の例では, 主要部 *naay* ‘the house’ が [] で示された修飾部の外に置かれ⁴, 本来それが現われるべき場所を示す標識 ((11) では =*ga*) のホストの位置に不定代名詞 *gə* (3.1 参照) が現われている。

- (11) gyaan ’lə=guŋga [gə=ga taana-dyas] naay ?un=gu
 and his=father INDF=in smoke.fish-DUR[NONPAST] the.house top=at
 ’laa ’la gaʔənaa-gaa-s.
 3 3 put.up.on-EVD-NONPAST
 ‘His father put him up on the top of the house in which he was smoking fish.’ (Swanton 1905: 13 [Enrico 2003: 566])

このような主要部外在型の連体修飾構造は, 関与する標識が場所や方向を示す場合に限られる。

一方, (11) は, 下例のように, 不定代名詞 *gə* が占めていた位置に主要部の *naay* を移動させて主要部内在型の連体修飾節によって表現することも可能であ

⁴ 主要部外在型の連体修飾節の例では, [] は修飾部を表わす。

る。

(11') gyaan 'lə=guŋga [naay=ga taana-dyas] ?un=gu
and his=father the.house=in smoke.fish-DUR[NONPAST] top=at
'laa 'la gaʔənaa-gaa-s.
3 3 put.up.on-EVD-NONPAST

(11) と (11') を比べると, (11) の不定代名詞 *gə* は, 主要部である *naay* 'the house' が修飾部の外に移動したことにより, その空所となった位置を埋めるとみることができる。3.1にみるように, ハイダ語では, 主要部が現われないことがあるが, その主要部が場所の標識 (例えば, =*ga* 'in' や =*gu* 'at') のホストである場合は, そのホストとなる名詞句と標識全体が現われなくなり, 標識だけが残ることはない (下掲の (25) を参照), (11) のような場合は, それを避けるために [] の外に出た主要部が本来占めていた位置に不定代名詞が現われていると解釈すべきであろう。しかし, 一方では, (11) における不定代名詞 *gə* が主要部名詞 *naay* 'the house' と同一の対象を指示していることから, 主要部外在型の連体修飾構造とみるよりも, (11) において [] で示した部分が主要部の名詞と並置され, 修飾一被修飾の関係をなしているともみることができ (5.2, 6 節も参照)。

これと類似する構造として, Enrico (2003: 637) には次のような例があげられている (表記は本稿のものに改めた)。

(12) [gə=gu tlaaləŋ=sda nəŋ ?waa-gaa-gəŋ] xaaydagaay='uu
INDF=at own.husband=from INDF cheat.on-EVD-PAST people=FOC
t'ə=hayluudaayaa-gəŋ.
they=destroy[EVD]-PAST
'They destroyed the people of the place where someone had cheated on her husband.' (Swanton 1901: 569 [Enrico 2003: 637])

(12) は [] で示された修飾部が被修飾名詞の前に現われる点で (11) の主要部外在型の連体修飾節と類似するが, Enrico (2003: 637) は, [] にある不定代名詞の *nəŋ* とその外にある主要部の *xaaydagaay* 'people' の指示対象が異なるゆえに, (11) のような「主要部外在型」の「関係節」と分析するのではなく,

[] を不定代名詞 *nəŋ* を主要部とする関係節であると見做し、それが後続の名詞 *ɣaaydagaay* ‘people’ と複合 compound をなすと分析する⁵。

主要部内在型と外在型の連体修飾節, 更に, (12) のような例をどのように捉えるかについては, 5.2 で扱う連体修飾構造と併せて6節で再度述べることにする。

3. 主要部の特徴

本節では, ハイダ語の連体修飾構造の主要部に現われるものとして特に不定代名詞の使い分けについて述べるとともに, Keenan and Comrie (1977) の「接近可能性の階層」を参考に, 連体修飾節においてどのような文法役割にある名詞句が主要部となり得るか (以上3.1), 更に, 主要部の定性 definiteness (3.2) について述べる。

3.1 主要部となり得るもの

[1] 人称代名詞, 不定代名詞

主要部には, 普通名詞だけでなく, 人称代名詞もなり得る。次の (13) は3人称代名詞 *ʔə=* が主要部となっている例である。

- (13) [taŋgunaay=ga ʔə=quyʔawaa+qʔuʔjiʔwaa-s]
the.ocean=at 3=cumulus.cloud[VBLZ]+rise.out[EVD]-NONPAST
ʔə=ʔawga qyaanʒaa-s.
his=mother see[EVD]-NONPAST
‘His mother saw him who was a cumulus cloud rising out at sea.’ (Swanton 1905: 29 [Enrico 1995: 112])

ハイダ語の連体修飾構造では, 代名詞の中でも不定代名詞が主要部となることが多い。主要部となり得る不定代名詞には, *nəŋ* ‘someone,’ *tʔaa* (自立語) ~ *tʔə* (クリティック) ‘some people,’ *gə* ‘something (sg.)/some (pl.),’ *gina* ‘something’ がある。これらの不定代名詞の違いは, (14) に示すように, 主に [anaphoric], [sg/pl], [animate/inanimate] という3つの特徴で記述することができる⁶。

⁵ Enricoによれば, このような構造をなすのは, *ɣaaydagaay* ‘people’ の場合だけであり, 語彙的に極めて限定されている。

(14) 主要部となり得る不定代名詞

	[anaphoric]	[sg/pl]	[animate]
<i>nəŋ</i>	±	sg	±
<i>tl'aa ~ tl'ə</i>	±	pl	+
<i>gina</i>	—	sg/pl	—
<i>gə</i>	±	sg/pl	±

- 1) [− anaphoric] は non-anaphoric を示し, [± anaphoric] は anaphoric と non-anaphoric の両様の用法があることを示す。
- 2) sg/pl は数の区別に関与しないことを表わす。
- 3) [− animate] は無生物, [± animate] は有生物・無生物の両方を指示し得ることを表わす。

これらの不定代名詞のうち, まず, *nəŋ* が指示するのは, 典型的には単数の人であるが, それに加えて動物やカヌーなどの可動物も指示し得る (指示対象が人の例は, 上掲 (10) を参照)。次の (15) は文脈からある種の動物, (16) はカヌーを指示している例である。

(15) … [nəŋ tɬaɬ kaljuu] ?iid=gá dləxyaŋ-daal.

INDF be.black be.big us=to run-along

‘… a big black one (=something big and black) ran toward us.’

(16) sdalaay=qulgi [nəŋ 'la giitgii-da-tlaagaŋaa-s]

the.cliff=above INDF 3 be.completed-CAUS-first[EVD]-NONPAST

sdalaay=guusda 'la kit'a-gaayaa-gən.

the.cliff=from.upon 3 push.with.pole-into.water[EVD]-PAST

‘He pushed the one (canoe) that he finished first on the brow of the hill into the water from the hill.’ (Swanton 1905: 33 [Enrico 2005: 136])

(15) における不定代名詞 *nəŋ* を主要部とする連体修飾節「黒くて大きいもの」は, その前の文脈において先行する指示対象が現われていない点で非前方照応

⁶ 本稿で示した不定代名詞の区別は, Enrico (2003: 467ff.) と重なるところが多いが, Enrico (2003) は, 本稿の [animate] という特徴のかわりに [human] という特徴を立てている点 (cf. (15)), また, *gina* をあげていない点为本稿と異なる。

的な用法である。一方、(16)では、その先行文脈において「カヌー」が言及されており（下記の(18)がそれ）、不定代名詞 *nəŋ* とそれを含む連体修飾節は「カヌー」を指示していると判断されるので、この場合の *nəŋ* の使用は前方照応的であるといえる。

更に、この不定代名詞 *nəŋ* は、岬や山、島など地勢的な対象を指示する場合にも用いられる。例えば、

(17) huu [nəŋ kunjuu-s]=gu t'aləŋ gaysdlə-gən.
 then INDF be.a.point-NONPAST=at we stop-PAST
 'We stopped at one point (= something being a point).'

(18) sqaay 'lənagaay=gyaawgi [nəŋ sdalaa-s]=gu='uu
 Sqaay the.town=at.the.edge.of INDF cliff[VBLZ]-NONPAST=at=FOC
 ʔwadgadagaŋ χiw=gi qaydaaw=gan
 Carpenter.Spirit southeast=to go.on.a.raid=for
 tləw tləguʔga-xidaa-gən.
 boat make-INCEP[EVD]-PAST
 'Master-carpenter began to make a canoe at a steep place (= something being a cliff) at the edge of the town of Sqaay in order to war with southeast wind.' (Swanton 1905: 33)

これらの例における *nəŋ* は、いずれも非前方照応的な用法である（すなわち、先行文脈において *nəŋ* の指示対象が言及されていない）。

tl'aa ~ tl'ə は、主に複数の「人」を表わす⁷。(19)にみる *tl'ə* は、その先行文脈においてそれと照応する要素（いわゆる先行詞 antecedent）がないことから、非前方照応的な用法である。

(19) [gu tl'ə=na-χaŋ-s] ʔwaa=dləw=χan=gan='uu ʔiid ʔunsiidən.
 at INDF=live-PL-NONPAST all=for=FOC we know[PAST]
 'We knew all people who lived there.'

⁷ Enrico (2003: 470) は、総称的な用法の場合は単数を表わすこともあるとしているが、筆者の調査においては、そのような例は得られていない。

次に不定代名詞 *gina* についてみると、これが他の不定代名詞と異なるのは、非前方照応的な用法しかなく、また、指示対象が無生物に限られるという点である。

(20) [*gina* tɔdaldaga-s]

INDF make.a.ringing.noise-NONPAST

t'ələŋ tɔ-dal-daga-sdlə.

we by.hand-CL-MAKE.A.NOISE-completely

'We rang the bell (= something that makes a ringing noise).'

この例における不定代名詞 *gina* とそれにかかる修飾語 *tɔdaldaga* 'make a ringing noise' 全体でいわゆる「ベル」一般を表わしており、それが指示する先行詞を必要とはしない (cf. 日本語の「鳴り物」の「物」)。更に、この *gina* は、具体的なものではなく、出来事を指示することがあり、その場合は、発話あるいは思考を表わす動詞の項として現われる (cf. 日本語の「こと (について語る)」などの「こと」)。

(21) [tɔsdaa **gina** ʔaaʔjuu-gəŋ-giin-ii]=ʔad='uu

long.time.ago INDF happen-HABIT-PAST-INFO=about=FOC

ʔə=giʔəʔgalaanʔdas-ga

I=tell.stories[FUT]-NONPAST

'I am going to talk about something that used to happen a long time ago.'

不定代名詞 *gə* は、有生物・無生物のいずれに対しても用いられる。数の区別に関しては、有生物の場合は複数性を示すことが多く、無生物の場合は単数と複数のいずれでもあり得る。次の (22) は複数の有生物 (人間), (23) は無生物 (文脈から複数) が指示対象の例である。

(22) [gə q'ayaa-s]=gan tɔ'ə=yahgudəŋ-geey ʔwaa=gi kilxigəŋ-ga.

INDF old-NONPAST=for they=respect-NMLZ that=to need-NONPAST

'They have to respect elders.'

(23) ʔwaadχa+naay qwaan=gii t'aləŋ dayiŋ=qawdi='uu
 sell+house many=into we look.for=after.a.while=FOC
 [gə ʔiid gud'laa-s] t'aləŋ qiiχa-gən.
 INDF we like-NONPAST we find-PAST
 'We looked for (hats) in many stores for a while, and we found some we liked.'

(23) の *gə* は、その先行文脈にあった「帽子」を指していると考えられるので、前方照応的である。

この不定代名詞の *gə* は、更に、連体修飾節の主要部として現われる場合、「場所」を表わすこともある（場所を示す標識のホストとして現われる場合は *gyaa* という形式となることもある。尚、先の (11) も参照）。例えば、

(24) … [gyaa=ga q'əw-ʔwəs]=gu 'la sgaytə-gən.
 INDF=at sit-SG[NONPAST]=at 3 cry-PAST
 '… he cried at the place where he was.'

[2] 主要部が現われない場合

ハイダ語の連体修飾構造においては主要部が現われないこともある。多くの場合において、主要部のない連体修飾構造というよりも、上にあげた不定代名詞が省略されていると考えられる。例えば、下例の場合、本来であれば *gə* ~ *gyaa* を主要部とし、それに場所を示す標識=*gu* 'at' を加えた *gyaa=gu* (INDF=at) が現われるところであるが、特に主節の動詞が *na* 'live' の場合は、それら名詞句とクリティック全体が省略されることが多い（下記の (25) (26) では \emptyset で示す）。

(25) 'laa 'la ʔisda=di=qawdi
 3 3 do=during=a.while
 c'injaay [yaagaləŋ \emptyset na-χaanjaa-s-ii]=ga='uu
 beaver parents live-PL[EVD]-NONPAST-INFO=to=FOC
 qaaydaa-gən-ii.
 leave[EVD]-PAST-INFO
 'After he had fought him for a while Beaver went to (the place where = \emptyset)

his parents lived.’ (Swanton 1905: 42)

- (26) … [dii cinga ∅ na-χaŋeey]=gii ’la qaa-guŋ-s.
my grandfather live-PL[NMLZ]=into 3 walk-around-NONPAST
‘… he walked around (the place where =∅) my grandfather lived.’

また、*ʔiitəŋaa* ‘be male’, *jaada* ‘be female’などは、それと現われるべき不定代名詞 *nəŋ* が省略され、それだけで名詞として働くことがある⁸。

更に、指示対象が何であるかが文脈から明らかな場合、とりわけその談話において一貫して話題となっている名詞が省略されることがあるが、それが連体修飾節の主要部となる場合でも省略されることがある。例えば、

- (27) [∅ gaŋaa-s-ii]=gi=’uu t’aləŋ halχa-gaŋ.
thick-NONPAST-INFO=to=FOC we gather-PR
‘We get the thick (herring roes =∅).’ (Levine 1977: 225)

この文は、*k’aaw* ‘herring roes’ が話題の中心となって展開されている談話の中において発せられたものである。この文の前に発せられたいくつかの文においても述語動詞がこの (27) と同じ *halχa* ‘gather’ であり、また、その目的語が *k’aaw* ‘herring roes’ であることが分かるために主要部が省略されていると考えられる (cf. 日本語「厚いの (=子持ち昆布) (をとる)」)。

また、無主語動詞は、それと統語的に関与する名詞項がないために、それが修飾語となる場合は、主要部は現われない。例えば、

- (28) “q’a kun=gu [kun-gəŋ] tə=q’idtl’ə-sdlə-gəŋ.”
north point=at whale.drift.ashore-PAST I=cut-completely-PAST
“I cut up a whale which had floated ashore at North Cape.” (Swanton 1905: 49)

この修飾部に現われている動詞 *kun* ‘(whale) drift ashore’ は主語をとることができず (すなわち、ゼロ項動詞)、従って、連体修飾構造の修飾部となる際は、そ

⁸ 更に、*hi’agan ʔinaa* (still grow) ‘youth, young people’のように、主要部が現われない慣用的なものもある。

の主要部は現われることがない。ただ、それが名詞化ではなく動詞のままであることは、過去時制の標識 *-gən* が付いていることから分かる（名詞化接尾辞 *-gaay* は時制標識と共起しない）。

[3] 接近可能性の階層 *accessibility hierarchy* (Keenan and Comrie 1977) との関係

Keenan and Comrie (1977) によれば、関係節となる主要部名詞の文法役割は、次に示すような階層をなす。

(29) 接近可能性の階層 (Keenan and Comrie 1977)

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格 > 属格 > 比較の対象

ハイダ語において「比較の対象」を主要部とする連体修飾節が可能であることを示す資料を得ていないが、次に示すように、少なくとも所有者までを主要部とする連体修飾節をつくるのが可能である。(30) と (31) は、主要部がそれぞれ修飾部の自動詞と他動詞の主語となっている連体修飾節である。

(30) 自動詞の主語

ʔaa=’uu [χidʔiid xid] c’i-gən.
I=FOC bird fly shoot-PAST
‘I shot a flying bird.’

(31) 他動詞の主語

[χa dəŋ xidxiidən]=’uu gyaagən ʔiiji.
dog you chase[PAST]=FOC mine be[NONPAST]
‘The dog which chased you is mine.’

ハイダ語の二項動詞には、目的語となる名詞句に一切標識が付かない場合（下の (32)）とある一定の標識を必要とするものがある（下の (33)）。後者については、その標識の種類によって動詞を更に細かく分類することができるが、(33) にあげた動詞 *tləgaadʔə* ‘break’ は、その目的語となる名詞句が *=cii* で標示されている。この標識は本来の意味は ‘into’ であるが、この種の「壊す」を表わす動詞と現われる場合は、その本来の意味はなく、専ら目的語の標識として働く。

(32) 直接目的語 (1)

'laa='uu [na sdiŋ 'laa daga-s] dii 'laa qinda-gən.
 3=FOC house be.two 3 have-NONPAST me 3 show-PAST
 'He showed me two houses he owned.'

(33) 直接目的語 (2)

[k'iwaay=gii 'laa tləgaadʔə-gən] ʔə=tləguʔga-gən.
 the.door=into 3 break-PAST I=fix-PAST
 'I fixed the door that he broke.'

間接目的語が主要部となる場合についてみると、ハイダ語には、間接目的語を標示するための専用の標識はなく、例えば、「受け手」を表わす間接目的語は =gi 'to' で標示されることが多い。(34) は間接目的語となる不定代名詞の nəŋ 'one' がそのクリティックで標示されている例である⁹。

(34) … [[nəŋ=gi 'la gə ʔisda-gaay]₁ gaawaa-s]₂=gi
 INDF=to 3 INDF give-NMLZ remain[EVD]-NONPAST=to
 'la gə ʔisdaa-s.
 3 INDF give[EVD]-NONPAST
 '… she gave some to one to whom she had not given it yet.' (Swanton 1905:
 49)

この例の []₁ で括られた部分 (日本語に直訳すれば「彼女がいくらかのもの (=食べ物) を与えた人」 < 「彼女が人にいくらかのものを与えた」) が間接目的語を主要部とする連体修飾節である。この例においては、それが名詞化されて gaawaas 'remain' を述語とする連体修飾節の主要部になり、それが更に =gi を伴って主節の間接目的語となっている。

Keenan and Comrie (1977) がいうところの「斜格」の名詞句が主要部となる連体修飾節の例として、それぞれクリティック =guy 'toward' (35), =gan 'for' (36), =pad 'with' (37) によって標示される名詞句が主要部となる場合をあげておく。

⁹ 例えば、(27) では、同じクリティック =gi が halʒa 'gather' の目的語の標識として用いられている。

- (35) [ŋaalaay=guy='uu huusii ciigəŋ-s-ii]
 the.kelp=toward=FOC that spawn-NONPAST-INFO
 gaŋaa-giiʔ-s=gyaan ...
 thick-become-NONPAST=when
 'When the kelp on which they spawn gets thick, ...' (Levine 1977: 225)
- (36) [nəŋ=gan ʔə=ʔgaŋgulyʒa-s]=gi='uu tɬ'ə=k'ugad-gən.
 INDF=for I=work-NONPAST=to=FOC they=tell.a.lie-PAST
 'They lied to the one that I worked for.'
- (37) [[nəŋ] ʔiiʔəŋaa]=ʔad ʔə=xyaat-gasəs]='uu
 INDF be.male=with I=dance-FUT[NONPAST]=FOC
 dii daaga ʔiiji.
 my brother be[NONPAST]
 'The man (= lit. the one who is male) that I will dance with is my brother.'

最後に「属格」名詞についてみると、ハイダ語には譲渡可能所有と譲渡不可能所有の区別がある。前者の所有句は、「所有者 *gyaa* (*ga*) 被所有者 - 限定接尾辞」というように、所有者と被所有者の間に所有関係を表わす *gyaa* (*ga*) という小詞 particle が入り、更に被所有者に限定接尾辞 (DEF) *-gaay* ~ *-aay* が付加される (限定接尾辞については 3.2 も参照)。(38) は所有者の不定代名詞の *nəŋ* が主要部となる連体修飾節の例である。

- (38) [nəŋ gyaa endʒin-gaay daguyaa-s]='uu 'laa=gi gaadgiidəŋ-giin-ii.
 INDF POSS engine-DEF strong-NONPAST=FOC 3=to tow[HABIT]-PAST-INFO
 '..., somebody whose engine was strong used to tow him.'

対して、譲渡不可能所有では、所有者と被所有者が並置され、被所有者には身体部位名称かそれ以外 (例えば、親族名称など) によって異なる接辞が付く。例えば、下の (39) は、不定代名詞 *nəŋ* 'the one' が所有者、*ʒaŋʔii* 'eyes' が被所有者となる所有句において、その所有者が主要部となる連体修飾構造の例である。

- (39) … [nəŋ χaŋʔii st'i+tləjaawaa-s]
 INDF eye be.sick+so[EVD]-NONPAST
 gəm gi gina xát'as-gaŋaa-s.
 NEG to INDF be.nothing.wrong-NEG[EVD]-NONPAST
 '… there was nothing wrong with the one whose eyes had been so sore.'
 (Swanton 1905: 8)

更に、(40) では、被所有者である *dajij* 'hat' に接尾辞 *-ga* が付いて所有関係が示されており、その所有者である不定代名詞 *nəŋ* が主要部、続く *tlah-gaa-s* が修飾部となる連体修飾構造をなしている。尚、この連体修飾構造は、その後の *?waanawaay* 'thread of life' の所有者でもある。

- (40) gyaan [nəŋ dajij-ga tlah-gaa-s] ?waanawaay=gi=sgun=χan
 and INDF hat-ATTR be.new-EVD-NONPAST thread.of.life=to=only=EMPH
 'la χagad-sga-s=gyaan …
 3 seize-to.centre-NONPAST=and
 'Then she seized only the thread of life of the person whose hat was new,
 …' (Swanton 1905: 31 [Enrico 1995: 114])

Keenan and Comrie (1977: 91) によれば、ヨルバ語 Yoruba では譲渡不可能所有における所有者が主要部となるような連体修飾構造は好まれないようであるが、ハイダ語では、そのような制約はないとみられる。

3.2 主要部の定性

これまでみてきた例から明らかのように、ハイダ語には、主要部が移動せずにそのまま修飾部に残る主要部内在型の連体修飾構造がみられる。Williamson (1987), Basilico (1996) によれば、そうした主要部内在型の連体修飾構造においては、その主要部は形態的に不定 *indefinite* であるとされるが、ハイダ語においては、主要部が普通名詞である場合は、限定接尾辞 *-gaay* ~ *-aay* が付加され得ることから、それらの主張は当て嵌まらないといえる。ハイダ語における限定接尾辞の機能については、より詳しい調査が必要であるが、少なくとも、(a) それが付加される名詞が先行文脈において言及され、話し手と聞き手の間でその指示対象が了解されている場合、あるいは、(b) 話し手と聞き手の間で

それが特定のものを指示することが了解されている場合に、この限定接尾辞が付加されるといえる。例えば、次の(41)は前者、(42)は後者の例である。

- (41) siŋgyaan t'aləŋ sɔyaal-gaay=dləw [tələwaay=gu='uu ʔis]=sda
 back we return[NMLZ]=when the.boat=at=FOC be=from
 nəŋ ʔiiŋəŋaa gad-gi.
 INDF be.male dive-into.water

‘On our way back, one man dove into the water from the boat (we) were on.’

—— 先行文脈において、「私たち」が「ボート」に乗って移動していることが述べられている。

- (42) … [gadgic'aaʔwaay naay ʔun=gu ʔis-is]=guy
 the.window the.house top=at be-NONPAST=toward
 t'aləŋ qiiχaay=dləw ʔiid skuji=χan yaan gəw-gəŋ.
 we look[NMLZ]=when our bone=EMPH truly miss-PAST
 ‘… when we looked up toward the window which was on the roof of the building, we were really surprised.’

—— その「建物」において「屋根」にある「窓」は一つしかない。

主要部となる普通名詞が「定」であることは、ここにあげた限定接尾辞だけでなく、連体修飾節における動詞の時制標識の有無によっても示される(4.1参照)。とりわけこの限定接尾辞が付加されない不定代名詞が主要部となる場合は、その指示対象が「定」であることを示すために、修飾部の動詞の時制標識がその機能を担う。

主要部の定性に関連して、所有句構造をみると、ハイダ語において区別される譲渡可能所有と譲渡不可能所有のうち、まず譲渡可能所有における被所有者が他動詞の目的語である場合、主語がその所有者と同じであれば、所有者は再帰所有代名詞 *ʔaŋga* を用いて *ʔaŋga* NP ‘own NP’ のように表わされ、一方、主語と所有者が異なれば、NP₁ *gyaa(ga)* NP₂ ‘NP₁’s NP₂’ あるいは NP₂ NP_{1-ga} ‘NP₁’s NP₂’ のように表わされる(但し、主語と所有者が同じ、すなわち再帰所有を表わすこともある)。下の(43a)は主語と所有者が同じ場合、(43b, b’)は主語と所有者が異なる場合である(目的語を下線で示す)。いずれにおいても被所有名詞である *χa* ‘dog’ (下の例では形態音韻規則で *χaa* になっている)に限定

接尾辞 *-gaay* が付加されている (3.1 も参照)。

- (43) a. χaagaay ʔaŋga 'laa qiŋ-gən.
 the.dog own 3 see-PAST
 'He saw his own dog.'
- b. 'laa gyaaga χaagaay 'laa qiŋ-gən.
 3 POSS the.dog 3 see-PAST
- b'. χaagaay 'laa-ga 'laa qiŋ-gən.
 the.dog 3-ATTR 3 see-PAST
 'He_i saw his_j/his own dog.'

これらの例における被所有者 *χaagaay* 'the dog' を主要部とする連体修飾構造は、次に示すとおりである。いずれも *χaagaay* 'the dog' が主節の動詞 *qiŋ* 'see' の目的語となっている。

- (44) a. [χaagaay haana-s] ʔaŋga 'laa qiŋ-gən.
 the.dog be.pretty-NONPAST own 3 see-PAST
 'He saw his own pretty dog.'
- a'. *[χaagaay ʔaŋga haanas] 'laa qiŋ-gən.
- b. ['laa gyaaga χaagaay haana-s] 'laa qiŋ-gən.
 3 POSS the.dog be.pretty-NONPAST 3 see-PAST
- b'. [χaagaay 'laa-ga haana-s] 'laa qiŋ-gən.
 the.dog 3-ATTR be.pretty-NONPAST 3 see-PAST
 'He_i saw his_j/his own pretty dog.'

この例から明らかなように、再帰所有代名詞 *ʔaŋga* は連体修飾節の外に置かれるのに対し ((44a) と (44a') を比較)、主節の主語と目的語となる所有句の所有者が異なる場合、所有者は連体修飾節の中に入る ((44b, b') を参照)。再帰所有代名詞が連体修飾節の外にあることは、(44a') の連体修飾節だけを取り出すと、単独の文として成り立たないことから窺える ((44b, b') の連体修飾節は、それだけでも文として成立し得る)。

(44a'') *χaagaay ʔaŋga haana-s.

一方、譲渡不可能所有における被所有者が他動詞の目的語として現われ、かつ、主語と所有者が同じである場合には、被所有者となる名詞に再帰所有を示す接尾辞 -ŋ (~ əŋ ~ iŋ) が付加される。例えば（上と同様、目的語には下線を付す）、

(45) a. jaaga-ŋ 'laa qiŋ-gən.

wife-REFL.POSS 3 see-PAST

'He saw his own wife.'

b. qajiŋ ʔə=tləsgiidən.

head[REFL.POSS] I=touch[PAST]

'I touched my head.'

しかし、主節の目的語となる被所有者が主要部となる連体修飾構造においては、被所有者に再帰所有を表わす標識が付かず、所有者は、3人称代名詞であればクリティック形 'lə=, それ以外の人称代名詞の場合は、被所有者に並置されて示される。例えば、

(46) a. ['lə=jaaga haana-s] 'laa qiŋ-gən.

his=wife be.pretty-NONPAST 3 see-PAST

'He_i saw his_{i/j} pretty wife.'

b. ['lə=qaji k'aagaa-s] 'laa tləsgiidən.

his=hair be.dry-NONPAST 3 touch[PAST]

'He_i touched his_{i/j} dry hair.'

c. ʔaa='uu [dii st'aay k'uc'iga-s] xiʔda-gən.

I=FOC my foot be.itchy-NONPAST scratch-PAST

'I scratched my itchy foot.'

従って、(46a) (46b) において、主語 (= 3人称代名詞) とその所有者が同一であるのか、それとも異なるのかは、文脈がなければ曖昧になってしまう。

4. 修飾部の構造

本節では、ハイダ語の連体修飾構造の修飾部について、単純な構造をなすもの（すなわち、修飾部が動詞1語からなるもの）からより複雑な構造をなすもの（すなわち、修飾部が節である場合や一つの主要部に対し複数の修飾部がある場合）の順に扱うことにする。

4.1 修飾部におけるTAM標識

ハイダ語の連体修飾構造の修飾部に現われる時制・アスペクト・モードに関わる標識（TAM標識）は、主節のそれに比べ、その現われに制約がある。すなわち、連体修飾部に現われるTAM標識は、主節に現われるそれと若干異なる。

まず、主節に現われるTAM標識をみると、それらの組み合わせは(47)に示すようにまとめられる。表中の[1]などは、それらの承接順序を表わし、同じ位置（スロット）に入る要素は範例関係にあり共起することができない。また、括弧内にある要素は随意的である。

(47) 主節の述語に現われるTAM標識とその組み合わせ

[1]	[2]	[3]
(- <i>gaa</i> [EVD])	<i>-gən</i> [PAST] <i>-s</i> [NONPAST]	(- <i>ii</i> [INFO])
	<i>-ga</i> [NONPAST] <i>-∅</i>	

これらのTAM標識のうち、[2]に現われる4つの接尾辞は、文末の述語を形成するための必須要素であるのに対し、[1]と[3]の要素は随意的である¹⁰。[2]の要素のうち、*-s*と*-ga*は、ともに「非過去」を表わし、いずれも主節に現われ得るが、前者は、前の文で示される時制によって決まる相対的な時制の標識であるのに対し、後者は、前の節とは関係なしにより明示的に「非過去」を表わす標識である。また、[2]の*-∅*（ゼロ標識）は、命令文や極性疑問文（現在時制）に現われる。[1]に現われる*-gaa* [EVD]と[3]の*-ii* [INFO]は、[2]の*-ga*

¹⁰ 実際には、TAM標識は他にも認められるが（Hori 2016参照）、ここでは連体修飾構造に主に関わるものだけを取り上げた。尚、現在の話者が話すハイダ語においては、その文末の述語にこの[2]の要素が現われない場合も多く見られる（堀 2013参照）。

[NONPAST], - \emptyset と共起しないという制約がある。

一方、連体修飾節に現われる TAM 標識とそれらの組み合わせは、次の通りである。

(48) 連体修飾節の述語に現われる TAM 標識とその組み合わせ

[1]	[2]	[3]
(- <i>gaa</i> [EVD])	- <i>gən</i> [PAST] - <i>s</i> [NONPAST]	(- <i>ii</i> [INFO])
- \emptyset		

(47) にあげた主節の述語の TAM 標識と異なるところは、連体修飾節の述語の [2] に「非過去」の -*ga* が現われない点である。このように、主節と連体修飾節の述語に現われる TAM 標識が異なることは、連体修飾節が自立性を欠く従属節の一種であることを示すといえる。

さて、(47) と (48) を比べて問題となるのは、- \emptyset (ゼロ標識) の機能の違いである。先に述べたように、主節の述部の - \emptyset は現在時制の極性疑問文や命令文に現われる。例えば、

(49) a. 極性疑問文

dəŋ=gwaa q'ud- \emptyset
 (you=INTER be.hungry- \emptyset)
 'Are you hungry?'

b. 命令文

'laa=gi=fa tləgəd- \emptyset
 (3=to=IMP help- \emptyset)
 'Help him/her!'

それに対し、連体修飾節におけるこのゼロ標識は、主要部となる被修飾名詞が不定である（より厳密に言えば、聞き手が了解していないと思われる新出の情報である）ことを表わし、定性を示す -*s* (非過去) と対立をなす。例えば、下例における主要部の名詞 ((50) の *ŋaal ga?andaa* 'seaweed', (51) の *tləw* 'boat') は、いずれもその前の発話に現われておらず、その談話において初めて導入された新出の情報を担う。

- (50) gaay=haw [ŋaal gaʔandaa ʔiwdəla-θ] daal-ʔgaʔda-tl-əʒaayaa-gən.
 that=FOC seaweed be.big[PL]-θ by.current-ROTATE-arrive[EVD]-PAST
 ‘A large amount of seaweed came floating with it.’ (Swanton 1905: 33)
- (51) [tləw ʔaadagaa-θ]=ʔuu ʔij-ii-gən.
 boat be.different-θ=FOC be-EVD-PAST
 ‘There was a different boat.’

いずれの例においても主要部となる名詞には3.2で述べた限定接尾辞 *-gaay* が付加されていない点にも注意されたい。

一方、それと対立する *-s* は、その主要部となる名詞句が、話者が聞き手によって同定され得ると想定する対象を表わす際に、その修飾部の述語に付加される。この場合、前の発話において言及されている必要はないので、必ずしも旧情報を表わすわけではない。

- (52) gaay=sda ʔisiŋ gaŋəŋ ʔlaa saawgaay=dləw
 that=from again like 3 say[NMLZ]=when
 [gina ʔla suuda-s]=gan ʔlə=ʔunsidaʔ-s.
 INDF 3 tell-NONPAST=for 3=understand-NONPAST
 ‘When he said like (this), she understood what he told about.’ (Swanton 1905: 27 [Enrico 1995: 108])
- (53) taanuud=gyaan [ciinaay sguga-s] hayluu-s=gyaan
 in.the.fall fish[DEF] go.up.river-NONPAST disappear-NONPAST=when
 ʒaw-gaay sqʔasgiidən.
 fish-NMLZ be.closed[PAST]
 ‘In the fall, when fish going up the creek (to hatch) disappeared, the fishing was over.’ (= (4))
- (54) gəm=ʔəsəŋ [naagaay=ga qaaxul+naay ʔisis]
 NEG=too house[DEF]=in defecate+room be[NONPAST]
 ʔlə=gyaagiŋ-guda-gəŋ.
 3=use-want-NEG
 ‘He did not want to use the toilet which was in the house.’ (= (6))

(52) の連体修飾節の述語に *-s* が付いているのは「彼が言ったこと」が先行文

脈から何のことが特定できるからである。また、(53)の連体修飾節の主要部 *ciinaay* (< *ciina-gaay*) は特定の「魚」というよりも一般的なそれ、更に、(54)の主要部 *qaaxul+naay* ‘toilet’ は、先行文脈にはないものの、一般的に「家」には「トイレ」があることから、聞き手が容易に同定できるゆえに、その修飾節に *-s* が現われているといえる。尚、主要部の定性は、3.2で述べたように、主要部となる名詞に限定接尾辞 *-gaay* を付すことによっても示されるが、主要部に付くそれと修飾部の述語に付加される *-s* は同時に現われる必要はなく、それらいずれか一方により、主要部の定性が示される。

このように、連体修飾節の述語に現われる *-s* とゼロ標識の主たる機能が主要部の定性を表わす点に着目すれば、主節に現われるそれら(上の(47)を参照)とは、形式は同じでも機能が異なるといえる。しかし、主節に現われるゼロ標識は、命令文と疑問文に現われることから広い意味での *irrealis* (あるいは不定や不特定の出来事)を表わすとみれば、連体修飾節のゼロ標識が主要部の不定性を表わすことと大きな隔たりがあるわけではない。一方、主節の *-s* (非過去)、更に *-ga* (非過去) や *-gən* (過去) は *realis* (あるいは定や特定の出来事)を表わすとみれば、*-s* などが連体修飾節において定性を表わす *-s* こととやはり相通するものがあるといえる。このような相通性がみられるのは、いずれも純粋に時制を表わすのではなく、ムードにも関わる要素であるからであろう。

連体修飾節における過去時制の標識は、主節の述語で表わされる出来事よりも前に起きたことを表わす。例えば、主節が過去時制の場合、主節の時制を参照点として、連体修飾節の述語が表わす行為や出来事が主節のそれらよりも前に生起したことが示される。

(55) *huu* [tɬəsdaa=χan=’uu *daalə* tɬ’ə=gijigiidən]
 then quite.a.while.ago=FOC money they=hold[PAST]
 ?iid=gi tɬ’ə=?isdas.
 us=to they=give[FUT]

‘They will give us money that they have kept for a long time.’

(56) [*dii* *jaasga* *dii=gi* *ciina* ?inaɣwaay ?isda-siŋ-gən]=k’yaawga
 my sister me=to fish half give-promise-PAST=for
 tɬə=gəd+q’əw-ʔu.
 I=wait+sit-SG

‘I sat down and waited for the half of fish that my sister promised to give

me.' = (5)

- (57) ['laa gyaaga qayʔaay q'amalgən] qiiχa-gən.
3 POSS the.dish crack[PAST] find-PAST
'He found his cracked dish.'

連体修飾節の述語が過去時制で表わされる場合は、主要部名詞の定性は、限定接尾辞 *-gaay* が付加されることによって示され (例えば, (57) *qayʔaay* [*< qayʔa-gaay*] 'the dish' を参照), 逆に限定接尾辞がなければ、不定であることが表わされる。

しかし, Swanton (1905) でみられるハイダ語¹¹ においては, 連体修飾節の述語が主節のそれよりも前の出来事や行為を表わす場合は, 連体修飾節の述語に証拠性接尾辞 *-gaa* (~ *-yaa* ~ *-aa* ~ *-ii*) が付加され, 更にその後に *-s* か *-θ* が付くことによって, 連体修飾節の主要部名詞が定 (*-s* の場合) か不定 (*-θ* の場合) かが示される。例えば,

- (58) gyaan ['laana ga-cudyaa-θ]=gansda 'la gi-daal-t'əχa-gaawaa-s.
and town CL-LIE[EVD]-θ=to 3 CL-ROOT-arrive-PL[EVD]-NONPAST
'Then they came to a town.' (Swanton 1905: 41)

—— '*laana* 'town' は先行文脈にはなく, その発話に新たに導入されたものの。

- (59) sdalaay=qulgi [nəŋ] 'la giiʔgii-da-tlaagaŋaa-s]
the.cliff=above INDF 3 be.completed-CAUS-first[EVD]-NONPAST
sdalaay=guusda 'la kit'a-gaayaa-gən.
the.cliff=from.upon 3 push.with.pole-into.water[EVD]-PAST
'He pushed the one (canoe) that he finished first on the brow of the hill into the water from the hill.' (Swanton 1905: 33) = (16)

—— 先行文脈においてその登場人物が「ボート」を作るという情報が与えられているために, その指示対象が何であるか同定することができる。

¹¹ おそらく1800年代半ばに生まれた話者を対象としている。

(60) [tl'aaʔda ʔun=gu 'la taydi-gaaŋaa-s] ʔun=gu
 board top=on 3 lie-HABIT[EVD]-NONPAST top=on
 'laa tl'ə=tlə-tay-s.
 3 they=by.hand-lie-NONPAST

'They laid him upon the plank on which he used to lie.' (Swanton 1905: 13-14)

—— 先行文脈において「板」に関する言及はないが、「いつも横たわっていた」特定の「板」を指示するとみて、限定的としているとみられる。

主要部名詞が不定であることは、連体修飾節の述語に付く-θだけでなく、過去時制の-gənによっても示される。つまり、この場合、-θと-gənはほぼ等価の機能を有すると考えられる。例えば、

(61) gyaan='uu [stl'əŋ=ga gə na-χaŋ-daayaa-gən] χaŋ=guusda
 and=FOC far.upinlet INDF live-PL-CAUS[EVD]-PAST front=from.upon
 tl'ə=jidxiidən-ii.
 3PL=shoot[PAST]-INFO

'Then some people who had been camping in the inlet began firing from in front.' (Swanton 1911: 277-05)

—— 先行文脈において「入り江で野営をする人たち」に関する言及はない。

この証拠性接尾辞は、主節の述語動詞に付加される場合は、その述語で表わされた出来事などについて話者が間接的に知っていることを表わすが、連体修飾節の述語に付加された場合は、そうした認識などのムードに関わるのではなく、端的に主節の出来事よりも前に生起したことを表わすと考えられる。Swantonが記録した時代のハイダ語においては、主節と連体修飾節においてそのような証拠性接尾辞の使い分けがなされていたといえる。更に、その時代のハイダ語においては、連体修飾節の述語が過去の出来事を表わす場合、主要部の定性は、その述語に-sもしくは-θが付くことによって表わされていたが、現代のハイダ語では、上に述べた通り、主要部に付く限定接尾辞の有無によって示されるようになった。こうした変化が生じたのは、現代の話者が話すハイダ語では、そ

もそもこの証拠性接尾辞がほとんど現われなくなったことが大きく関与していると考えられる。現代の話者でも、過去の疑問文において、時制標識として証拠性接尾辞を用いることがあるが、その現われが縮小したのは、この接尾辞に伴う形態音韻規則が複雑であることがひとつの要因として考えられるかもしれない（この辺りの変異と変化については、堀 2013 で述べたことがある）。

尚、Swanton (1905) において、現代の話者のように、連体修飾節が過去を表わす場合に証拠性接尾辞を伴わずに過去時制の *-gən* だけが現われる例は、皆無ではないものの、極めて少ないようである。

上にあげた連体修飾節の述語に現われる TAM 標識とその組み合わせ (48) には、更に [3] の位置に現われる要素として *-ii* [INFO] がある。Enrico (2003: 1334ff.) によれば、この接尾辞は、特に自動詞の主語となる名詞句が指示する対象を追跡し、それがその談話の主題として機能していることを表わすなど、情報構造に深く関わっているとみられる。しかしながら、現代の話者のハイダ語においては、この接尾辞の使用は廃れかかっており、特に連体修飾節の述語に現われることがほとんどなくなってきているので、連体修飾節における働きについてはまだ十分な解明に至っていない。下にあげるのは、この接尾辞を使用する話者（故人）の発話から得たものである。

(62) … huu qaydaay q’ul ?isəŋ [gə=gu ?ijii-gən-ii]=gu=ʒan
 then the.tree root again INDF=at be[EVD]-PAST-INFO=at=EMPH
 ?ijjin.
 be[PAST]

‘… the tree root was at the place where it had been before.’

(63) … [q’ad=xuy ʔdayigeey=gii=?əsəŋ gə daalguy-s-ii]
 offshore=toward the.deep.place=into=too INDF go.by.current-NONPAST-INFO
 gaay=?əsəŋ gəm qiŋ-gəŋ-gən.
 these=too NEG see-NEG-PAST

‘… (people) did not see these (= sea otters) that went into the deep place by tide offshore.’

(62) と (63) のいずれにおいても問題となる接尾辞 *-ii* は連体修飾節の述語となっている自動詞に付加されている。(62) ではその主語として現われている *qaydaay q’ul* ‘the tree root’ (但し、主節と同じであるため、連体修飾節では現

われていない)は、その先行文脈では3人称代名詞で指示され、しかも目的語として現われており、それが主語として現われた時、主題であることを示すためにこの接尾辞が用いられていると考えられる。(63)の不定代名詞の *gə* の指示対象は「ラッコ」であるが、やはり先行文脈では目的語として現われており、この接尾辞は、主語として現われたそれが主題であることを示すために付加されていると考えられる。

この接尾辞の現われは、同じ節や文に現われる名詞句の定性、またその名詞句の文法役割(自動詞主語の場合に多いが、他動詞主語では少ないなど)が関係していることが Enrico によって指摘されており、それらを含めてこの接尾辞の現われについて考察を重ねる必要がある。

4.2 複雑な構造をなす修飾部

ここでは、修飾部が比較的複雑な構造となっているものをあげるが、どの程度、複雑にしうるのか、また、複雑な構造をなす節に現われる名詞句のいずれを主要部とし得るのかについては、その詳細を論じるほど十分な資料が揃っていないので、ここでは、その一部しか扱えないことを予め断っておく。

まず、一つの主要部に複数の修飾語(節)がある場合をみてみると、その修飾部が状態などの形容詞的な概念を表わす動詞の場合は、おおよそ [PROPERTY – VALUE – DIMENSION – QUANTITY] (形容詞の概念の意味範疇は Dixon 2004 を参照) の順で現われる。

(64) a. q'iid=gu [na 'laa kaljuu] 'la daga.

Burnaby.Narrow=at house be.good be.big 3 have

'He had a big good house in Burnaby Narrow.'

[be.good (VALUE) – be.big (DIMENSION)]

b. …'laa=gansda [gə ʔiiʔəŋ-c'ida haana sdiŋ]

3=to INDF be.male-PL be.handsome be.two

gaŋdaal-tl'əχa-s.

walk-arrive-NONPAST

'…two handsome men (lit. two who were male and handsome) came to her.' (Swanton 1905: 49)

[be.male (PROPERTY) – be.handsome (VALUE) – be.two (QUANTITY)]

また, [AGE] は [PROPERTY – VALUE] の後, [QUANTITY] の前に現われるとみられる。

- (65) a. [nəŋ waasdan jinagaa hit'agan+ʔinaa]=ʼuu sgindaayaa-gən.
 INDF be.western be.lady be.young=FOC steer[EVD]-PAST
 ‘A young white girl drove the car.’
 [be.western (PROPERTY) – be.lady (PROPERTY) – be.young (AGE)]
- b. gaay=gagən=ʼuu [∅ hit'agan+ʔinaa qwaan]
 that=because.of=FOC be.young be.many
 ʒaayda+kil sq'adgayaay=χansgu ʔə=gudəŋ-ga.
 Haida.language learn[NMLZ]=for I=think-NONPAST
 ‘For that reason, I wish many young people learn Haida.’
 [be.young (AGE) – be.many (QUANTITY)]¹²

更に [COLOUR] は [DIMENSION] の前に現われる。

- (66) gə t'aləŋ xalʔgadaaldeey=dləw [taan ʔgaʔ kaljuu]
 INDF we drive[NMLZ]=when bear be.black be.big
 ʔgayuu=gu t'aləŋ qin-gən.
 Dead.Tree=at we see-PAST
 ‘While driving, we saw a big black bear at Dead Tree.’
 [be.black (COLOUR) – be.big (DIMENSION)]

[DIMENSION] と [AGE] の前後関係, あるいは, [VALUE] と [COLOUR] の前後関係など, 細部について十分に明らかにしていないところがあるが, [PROPERTY] が主要部に最も近く, [QUANTITY] が主要部から最も離れているといえる。しかし, 下記の例のように, 名詞+動詞からなる複合動詞 (いわゆる名詞抱合) が修飾部に現われる場合 (下記では *χaŋʔii+qaga* (eyes+disappear) ‘be blind’) は, [PROPERTY] は [QUANTITY] (下記では *sdiŋ* ‘be two’) よりも外に現われるとみられる。

¹² 但し, (65b) では主要部が省略されている (3.1参照)。

- (67) [Ø ʔiiʔəŋ-c'ida q'ayaa-s sdiŋ χaŋʔii+qaga-s]
 be.male-PL old-NONPAST two eyes+disappear-NONPAST
 'laa qiŋ-gəŋ.
 3 see-PAST
 'He saw two blind old men (lit. two men whose eyes disappeared).'

また、[QUANTITY]を表わすものでも述語になり得ない *ʔwaa=dləw=χan* 'all' や *sgwaana* 'one of' などの数量詞は、連体修飾節の外に現われる¹³。

- (68) [gina=χan dawuŋ-sga] ʔwaa=dləw=χan=ʔuu
 INDF=EMPH be.close-to centre all=FOC
 siʔgyaan t'aləŋ ʔisda-gəŋ-giin-ii.
 backward we bring-HABIT-PAST-INFO
 'We used to bring back all the stuff that was close (to us).'

- (69) dləw [Ø=gii ciina sguga-s-ii] sgwaana
 then into salmon go.up.river-NONPAST-INFO one.of
 dlə-st'a-giʔ-ŋ=dləw 'lə=qada-ŋ=gyaan …
 take.out-to.edge-IMP=when 3=slice-IMP=and
 'Then take out one of the salmon that comes up into it and …' (Swanton 1905: 8)

これらの数量詞のうち、*sgwaana* 'one of' は、下の (70a) に示すように、述語になり得ないが¹⁴、数詞（動詞の下位範疇に属する）は述語となり得る ((70b) において過去時制の標識 *-gəŋ* が数詞 *sgwaansiy* 'be one' に付加されている点に注意)。

¹³ これらが述語として現われず、また、連体修飾構造の外に置かれるという事実からこれらをここにあげた [QUANTITY] を表わす動詞と区別して「数量詞」という別個の語類として立てる必要がある (ハイダ語の語類を扱った堀 2006 は、この点を捉えていなかった)。

¹⁴ *ʔwaa=dləw=χan* 'all' は、そもそも指示詞 *ʔwaa* 'that' に 2 つのクリティックが付いた句であるため、それだけで述語にはならない。

- (70) a. ***[gii ciina sguga-s-ii] sgwaana-gən.**
 into salmon go.up.river-NONPAST-INFO one.of-PAST
 b. **[gii ciina sguga-s-ii] sgwaansiŋ-gən.**
 into salmon go.up.river-NONPAST-INFO be.one-PAST
 ‘There was one salmon going up into it.’

更に、修飾部が複雑な例として、副詞節が修飾部に含まれるもの (= (71)), 補文の主語が主要部として現われているもの (= (72)) がある。

- (71) **[’laana-gaay=ga ʔaa qaa-gən=dləw ʔaaydagaay ʔə=qaqan-gən]=ʔad**
 village-DEF=to I go-PAST=when people I=meet-PAST=with
 ʔaa xyaaʔ-gas-ga.
 I dance-FUT-NONPAST
 ‘I will dance with people who I met when I went to the village.’

- (72) **huu [[gina skaadəla] ʔagu ʔisis**
 then INDF be.small(PL) halibut be[NONPAST]
 t’aləŋ gudəŋ-gən]=guy=’uu k’waay taŋa t’aləŋ giʔadgu+giʔaŋ-gən.
 we think-PAST=to=FOC first salt we put+stand-PAST
 ‘We stood and first put some salt on the small things that we thought were
 (pieces of) halibut.’

また、1つの主要部に複数の修飾部が加わっているもの (いわゆる conjoined relative clause = (73) (74)) がある。この場合、2つの修飾部をつなぐ要素は現われない。

- (73) **[’laa-ga dəwjaay nəŋ q’uʔdaayaa-gən] ’laa qiiʔa-gən]**
 3-ATTR the.cat INDF steal[EVD]-PAST 3 find-PAST
 k’udʔwaalaa-gən.
 be.dead[EVD]-PAST
 ‘His cat that somebody had stolen that he found was dead.’

(74) … [nəŋ ʔiitəŋaa]₁ k'anc'i tɕagyaada]₂ tɕantɕk'yaa qaldada]₃
 INDF be.male wear.dancing.apron wear.cedar.bark.rings
 tləw dəŋgidaal-tl'əɣa-sga-gən …
 boat drag-arrive-to.centre-PAST
 '… a man (lit. one who was male) who wore a dancing apron and who wore
 cedar bark rings dragged a boat …' (Swanton 1911: 280)

(74) は、不定代名詞 *nəŋ* を主要部とする連体修飾節であり、それを *ʔiitəŋaa* 'be male', 更に *k'anc'i tɕagyaada* 'to wear a dancing apron' と *tɕantɕk'yaa qaldada* 'to wear cedar bark rings' が修飾している。*k'anc'i tɕagyaada* は名詞 *k'anc'i tɕagya* 'dancing apron' に動詞化接尾辞 *-da* が付いてできた出名動詞である。もう一方の *tɕantɕk'yaa qaldada* は、名詞 *qal* 'alder' に動詞化接尾辞 *-da* が付いてできた出名動詞 *qalda* 'dye with alder' が名詞 *tɕantɕk'yaa* 'cedar bark' を修飾し (すなわち, 'cedar bark dyed with alder'), 更にそれに動詞化接尾辞 *-da* が付いて 'to wear cedar bark rings' という動詞が派生されて主要部 *nəŋ* を修飾するという構造になっている。

5. ハイダ語の「関係節」と連体修飾構造

ここでは、議論の便宜上、主要部が修飾部の動詞と統語関係にあるような連体修飾構造を「関係節」と称することにし、関係節における主要部を同定する際の問題、更に、関係節以外の連体修飾構造について述べる。

5.1 主要部の同定

先に述べたように、ハイダ語の関係節においては、その述語動詞が節の末尾にくること以外、主要部の位置は決まっていない。従って、主要部内在型の関係節において広くみられるように、どれが主要部であるかが曖昧な場合が時として生じることがある。例えば、下の文は、二通りの解釈があり得る。

(75) [nəŋ jaada-s dəwjaay qin-gən] haana-gən. = (10)
 INDF be.female-NONPAST the.cat see-PAST be.pretty-PAST
 (a) 'The woman who saw the cat was pretty.'
 (b) 'The cat which the woman saw was pretty.'

この例における、関係節の中の2つの名詞句の文法役割をみると、*nəŋ jaadas* ‘the woman’が主語、*dəwjaay* ‘the cat’が目的語である（すなわち、関係節の中においてはSOVの配列順序）が、ハイダ語は他動詞節において常にSOVの配列順序をとるとは限らず、SとOの順序は、それぞれの名詞句の有生性によって決まる。ハイダ語における有生性は、大まかにいえば、「人間」「人間以外の有生物」「無生物」の3つの範疇に分けられ、例えば、優位である「人間」を表わす名詞句とそれよりも下位の範疇の名詞句が1つの文に現われた場合、OSVの解釈も可能になる。すなわち、例えば、(75)における関係節を取り出し、そのSとOとなっている名詞句の順序を入れ替えた次の文をみると、

- (76) *dəwjaay nəŋ jaadas qingən.*
 the.cat the.woman saw
 (a) ‘The cat saw the woman.’
 (b) ‘The woman saw the cat.’

のように、(a)と(b)の二通りの解釈があり得る。つまり(a)はSOV、(b)はOSVと解釈した場合であるが、このような二通りの解釈は、2つの名詞句の有生性に差がある際に生じる。従って、(76)を関係節にした場合、おそらく四通りの解釈が可能になる。

- (77) [*dəwjaay nəŋ jaadas qingən*] *haanagən.*
 the.cat the.woman saw was.pretty
 (a) ‘The cat which saw the woman was pretty.’
 (b) ‘The woman whom the cat saw was pretty.’
 (c) ‘The woman who saw the cat was pretty.’
 (d) ‘The cat which the woman saw was pretty.’

すなわち、(a)と(b)は関係節において*dəwjaay* ‘the cat’を主語とみた解釈、(c)と(d)は*nəŋ jaadas* ‘the woman’を主語とみた解釈である。但し、実際には、(a)か(b)のように*dəwjaay* ‘the cat’を関係節の主語とみる解釈が好まれるであろう（それでも、いずれが主要部であるかという曖昧性は残る）。

当然のことながら、関係節に2つの名詞句があったとしても、主節の動詞、あるいは関係節をホストとするクリティックとの意味的な関連性から、一義的

に主要部が分かる場合の方が多い。例えば、(78) では主節の述語 *huuna* ‘be dull’ の主語は、一般的な解釈では、関係節にある 2 つの名詞句のうち、*sgawaay* ‘the knife’ しかあり得ない。

- (78) [sgawaay Tom daga-s] huuna-ga.
 the.knife Tom have-NONPAST be.dull-NONPAST
 (a) ‘The knife that Tom has is dull.’
 (b) *‘Tom who the knife has is dull.’

同様に、(79) では、共格の標識 =*?ad* ‘with’ があることにより、そのホストとなる主要部は、*tləw* ‘boat’ ではなく *dii daaga* ‘my brother’ であることが分かり (すなわち (a) の解釈)、(b) のように解釈されることはない。

- (79) [dii daaga tləw daga-s]=?ad='uu ɬə=χaw-ʔin-gən.
 my brother boat own-NONPAST=with=FOC I=fish-go.on.vehicle-PAST
 (a) ‘I went fishing with my brother who owned a boat.’
 (b) *‘I went fishing on a boat which my brother owned.’

ところで、ハイダ語には、焦点標識 =*'uu* とよばれるものがある。この焦点標識は、名詞句に付き、談話における新情報や取り立てなどを表わすが、焦点標識が付加されることによってそのホストとなる名詞句などが文頭に移動したとしても、他動詞節に現われる 2 つの名詞句の間の文法関係における曖昧性が解消されるわけでもない。すなわち、(76) の文頭にある名詞句に焦点標識を付けた下の例においても、やはり 2 つの名詞句の間の文法関係は変わらない。

- (80) *dəwjaay='uu nəŋ jaadas qinɡən.*
 the.cat=FOC the.woman saw
 (a) ‘It was the cat that saw the woman.’
 (b) ‘It was the cat that the woman saw.’

従って、先にあげた (77) においても関係節の中で最初に現われる名詞 *dəwjaay* に焦点標識が付いたとしても、どれが主要部であるのかという曖昧性が解消されるわけではないと思われる。

尚, 焦点標識は, 関係節構造の中にも現われることがある。例えば,

- (81) siŋgyaan t'aləŋ sɔyaalgaay=dləw
 back we return[NMLZ]=when
 [tləwaay=gu='uu ʔis]=sda nəŋ ʔiitəŋaa gadgi.
 the.boat=on=FOC be=from INDF be.male dive.into.water
 'On our way back, one man dove into the water from the boat that (we)
 were on.' (= (41))

この文で *tləwaay=gu* 'on the boat' が主節の述語 *gadgi* 'dive into water' ではなく, 関係節の述語 *ʔis* 'be' と結びついていることから, 焦点標識 = 'uu' によって取り立てられた要素は [] で括った関係節の中にあるということができる (仮に「海に飛び込んだのがどこからか」を問題にするのであれば, 焦点標識は, =sda 'from' の後に付く)。

5.2 「外の関係」

寺村 (1975 など [1993]) がいう「外の関係」に相当するようにみえる連体修飾構造の一つとして *tləgu* 'how, the way' を主要部とするものがある¹⁵。この連体修飾構造においては, 主要部の *tləgu* が修飾部の前に現われるのが特徴である。(82) は *tləgu* が主節の主語, (83) は目的語, (84) はクリティック = *ʔad* 'about' のホストとなっている例である。

- (82) … tləgu [gandlaay kwahgaayaa-gəŋ-ii] ʔaadaagaa-gyaalgaa-gəŋ.
 how the.water flow[EVD]-PAST-INFO be.different-become[EVD]-PAST
 '… how the river flowed was different.'
 (83) tləgu [χaynaŋaa-təŋaa-s] t'aləŋ sq'adga.
 how be.alive-be.possible-NONPAST we learn
 'We learned how we could be alive.'

¹⁵ Enrico (2003) は, このような連体修飾構造を free relative clause と称している。

- (84) *tləgu* [χaayda kil tʰə=sqʼadga-s]=ʔad=ʼuu
 how Haida language I=learn-NONPAST=about=FOC
 tʰə=giʔəʔcalaŋda-xidi.
 I=tell.a.story-INCEP
 'I am going to talk about how I learned the Haida language.'

これらの連体修飾構造において、その主要部である *tləgu* は、修飾部における述語と文法関係にない、すなわちその項ではない。その点でいえば、寺村（1975 など [1993]）のいう「外の関係」にある連体修飾構造に相当するとみることができる¹⁶。

また、*tləgu* ‘the way, how’ 以外にも、*tlə* ‘place, where’ も同様にいわゆる「外の関係」の連体修飾構造を作る。

- (85) *tlə-giid* [tlʼə=cʼiχaaŋaa-s]=gii
 place-DIS they=sit.on.canoe[EVD]-NONPAST=into
 tlʼə=ʔtalgagii ʼla tləguʔgaa-s.
 their=nest 3 make[EVD]-NONPAST
 'They arranged their nests here and there where they sat on the canoe.'
 (Swanton 1905: 41)

これら *tləgu* ‘the way, how’, *tlə* ‘place, where’ は、間接疑問文で疑問詞として用いられるという共通点がある。

更に、これら「外の関係」の連体修飾構造に類するものとして、下記のような例がある（いずれも Enrico 2003: 1290 による。但し、表記は本稿のそれに統一し、グロスを一部改めた）。

¹⁶ Cf. 日本語：「川が流れる様子」「私たちが生きる術」「ハイダ語を学んだ方法」／「川の流れ方」「私たちの生き方」「ハイダ語の学び方」

(86) gyaan [tʰə=stʰi-gaa=gansda ʼla tʰə=dləga]
 and INDF=be.sick-EVD=for 3 they=hire
 gina-gaay=?əsiŋ qwaanaa-gən.
 property-DEF=too be.lots[EVD]-PAST

‘And the property for their hiring him for sick people was lots too.’ (Swanton 1905: 63 [Enrico 2003: 1290]¹⁷)

(87) … gyaan [ʼlə=χaw-gaaŋaa-s] ʼaanii-gaay
 and 3=fish-HABIT[EVD]-NONPAST gear-DEF
 ʼlaa taysdlə-sgaayaan ʼwan suu-ga.
 3 bring-to centre[EVD_COMP] they say-NONPAST

‘… and he brought out the gear with which he used to fish.’ (Swanton 1901: 103 [Enrico 2003: 1290]¹⁸)

(86)(87) の [] で示した部分がそれぞれ名詞 *gina-gaay* ‘the property’, *ʼaanii-gaay* ‘the gear’ を修飾しており、その部分だけで節として成り立つ。従って、これらの名詞はいずれも [] にある述語 (*dləga* ‘hire’, *χaw* ‘fish’) の項ではない。例えば、(87) の *ʼaanii-gaay* ‘the gear’ は、意味上、*χaw* ‘fish’ の道具を表わずと解釈できるので、このような構造以外に、下記のような関係節が可能なはずである。

(87') [ʼaanii-gaay=?ad ʼlə=χaw-gaaŋaa-s] ʼlaa taysdlə-sgaayaan
 gear-DEF=with 3=fish-HABIT-NONPAST 3 bring-to centre[EVD_COMP]
 ʼwan suu-ga.
 they say-NONPAST

¹⁷ 訳は Enrico (2003: 1290) による。しかし、Enrico (ibid.) では、ハイダ語を下記のように、原文のクリティック = *gansda* を = *gan* に、また、‘be sick’ と ‘hire’ を表わず動詞に証拠性接尾辞 (EVD; -*gaa* ~ -*yaa*) を付加するなど、いくつか変更を加えている (表記は本稿のものによる)。

tʰə=stʰi-gaa=gan ʼla tʰə=dləgayaa-gən gina-gaay=?əsiŋ qwaanaa-gən.
 INDF=be.sick-EVD=for 3 they=hire[EVD]-PAST property-DEF=too be.lots[EVD]-PAST

¹⁸ Enrico (ibid.) で引用されているのは連体修飾句の部分 (‘the gear with which he used to fish’) だけで、それ以外は、Swanton (1901) に基づいて堀が補った (但し、表記は本稿のものに統一した)。

すなわち、(87')において太字で示した主要部に=*ʔad* 'with'があることにより、それが関係節において述語 *χaw* 'fish'の道具であることが明示されるとみられる¹⁹。

このような事実から、(86)、(87)のような例も寺村(1975など[1993])のいう「外の関係」に相当するとみることができであろう(cf.日本語:「彼を雇う財産」「魚釣りに行く道具」)。ちなみに、Enrico(2003:1290)は、これらを定形節 *finite clause*²⁰が修飾部として働くとみており、やはり関係節の一種とは見做していない。これらの例に共通するのは、修飾部が被修飾名詞の前に現われるという点であり、その点からすれば、例えば、(82)や(85)におけるような *tləgu* 'the way, how', *tlə* 'place, where'を主要部とする修飾構造や(1)などにみるような典型的な修飾構造における語順と異なる。

ハイダ語において、このようにいわゆる「外の関係」にあるような連体修飾構造がどの程度認められるのかについては十分な調査ができていない。もし認められるとすれば、その条件は何かなど、更に明らかにすべき点が多い。尚、(84)をみると、主節の述語動詞 *giʔəʔgalaŋda* 'tell a story'で表わされる話の内容を示すクリティック=*ʔad* 'about'は、*tləgu*ではなく連体修飾節全体をホストとしていることから、連体修飾節全体が名詞句の役割をもつとみることができる。

6. ハイダ語の連体修飾構造をどのように捉えるか

ここでは、ハイダ語の連体修飾構造全体における主要部内在型関係節の位置付け、更には、これまでみてきた連体修飾構造のいくつかあるタイプをどのように捉えるのかについて現時点での私見をいくつかまとめて述べることにする。

主要部内在型の関係節をもつ言語は広く認められ、それをどのように位置付けるかについて、これまで様々な立場から多くの議論がなされてきた。その一つ一つを具に關することはできないが、大まかにみて、主要部内在型関係節全体を名詞化したものとみる立場(例えばBasilico 1996など)と主節の付加詞 *adjunct*であるとみる立場(吉村2002など)があるとみられる。そのうち、後

¹⁹ 但し、この点は話者には確認していないので、(87)と(87')の違いなども含めて明らかにする必要がある。

²⁰ 但し、(86)の修飾部に現われる述語 *dləca* 'hire'は、Swanton(1905:63)にある原文では屈折接尾辞が付いていない(注17に示したEnrico 2003:1290からの引用と比較)。

者の立場をとる吉村（2002）は、例えば、下記の（88b）を「の」を主要部とする主要部内在型関係節とし、その「の」に相当する再叙代名詞 *resumptive pronoun* が可能である点を指摘している（例も吉村2002: 133による）。

(88) a. * (遊びに来た) 友達は [[机の上に置いてある] 写真_i] をそれ_i をじっとながめていた。

b. ?? (遊びに来た) 友達は [[写真_iが机の上においてある] の] をそれ_i をじっとながめていた。

すなわち、主要部外在型の（88a）の場合は、「を」で示される名詞句が2つ連続するので非文であるが、主要部内在型の（88b）は「を」で示される名詞句が同じ文の中に2つあっても [] で示した主要部内在型の関係節が主節の述語「ながめる」の項ではなく付加詞であるために許容度が上がるとする。

ハイダ語でも、次にみるように、主要部の名詞句を指示する再叙代名詞が現われる例がある。

(89) [tl'ə=suuga nəŋ_i giwgaawaa-s]

3PL=among INDF be.mischievous[EVD]-NONPAST

galaay=gan 'la_i k'ah-gaa-s-ii.

the.mussel=for 3 laugh-EVD-NONPAST-INFO

'The mischievous one among them, he made fun of the mussels.' (Swanton 1905: 37)

この例における主節の3人称代名詞 *'la* は関係節の主要部 *nəŋ* と同一の対象を指示していることから再叙代名詞とみることができる。この例では、関係節と主節のいずれにおいても主語であったが、次にあげる（90a）では関係節と主節の両方においてクリティック（但し、クリティックが異なる）のホストとして、また、（90b）では関係節において主語として現われている主要部に対して主節ではそれと同一の対象を指示する再叙代名詞（この場合は指示代名詞 *gaay* 'these'）が目的語として現われている。

- (90) a. gyaan [q'ada gandlaay=t'aagi t'l'ə=gaysdlaa-s]
 and Seaward.Creek=at.the.mouth 3PL=float[EVD]-NONPAST
 'laa=gá='uu t'l'ə=?iijaŋ ?wan suu-ga.
 3=to=FOC 3PL=be[COMP] 3PL say-NONPAST
 'Then people floated at the mouth of Seaward Creek, to which they
 came.' (Swanton 1905: 11)
- b. … [q'ad=xuy †dayigeey=gii=?əsəŋ
 offshore=toward the.deep.place=into=too
 gə daalguy-s-ii] gaay=?əsəŋ gəm qiŋ-gəŋ-gən.
 INDF go.by.current-NONPAST-INFO these=too NEG see-NEG-PAST
 '…(people) did not see these (= sea otters) that went into the deep place
 by tide offshore.' = (63)

このような代名詞がどのような環境において現われるのかなど、いまだ明らかにし得ていない点もあるが、少なくともこのように再叙代名詞の使用が可能であることから考えれば、吉村（2002）が述べるように、ハイダ語の主要部内在型の関係節を付加詞と見做すことができるかのようにみえる²¹。

これまで述べてきたハイダ語の連体修飾構造をまとめると、ひとまず次のようなタイプがあるとみることができる（それぞれの代表となる例を再掲する）。

(91) ハイダ語における連体修飾構造のタイプ（太字は主要部）

- a. [… (NP) … V] … 主要部内在型関係節
 gəm=?əsəŋ [naagaay=ga **qaaxul+naay** ?isis]
 NEG=too the.house=in defecate+room be[NONPAST]
 'lə=gyaagiŋ-guda-gəŋ.
 3=use-want-NEG
 'He did not want to use the toilet which was in the house.' = (6)

²¹ ちなみに、吉村（2002）は、このような再叙代名詞が現われる日本語の例を他にもあげているが、いずれもその文には「??」が付いており、文法的な適格性は低いと判断されている。

- b. [INDF_i=PP … V] NP_i … 主要部外在型関係節
 gyaan 'lə=gun̩ga [gə_i=ga taana-dyas] naay_i ?un=gu
 and 3=father INDF=in smoke.fish-DUR[NONPAST] the.house top=at
 'laa 'la gaʔənaa-gaa-s.
 3 3 put.up.on-EVD-NONPAST
 'He put him up on the top of the house in which he was smoking fish.'
 (Swanton 1905: 13 [Enrico 2003: 566]) = (11)
- c. [… INDF_i … V] NP_j
 [gə=gu tlaaləŋ=sda nəŋ_i ?waa-gaa-gən] ʒaaydagaay_j=ʼuu
 INDF=at own.husband=from INDF cheat.on-EVD-PAST people=FOC
 tl'ə=hayluudaayaa-gən.
 they=destroy[EVD]-PAST
 'They destroyed the people of the place where someone had cheated on
 her husband.' (Swanton 1901: 569 [Enrico 2003: 637]) = (12)
- d. [… (NP_i) … V] NP_j … 「外の関係」
 gyaan ['lə=χaw-gaan̩aa-s] ?aanii-gaay
 and 3=fish-HABIT[EVD]-NONPAST gear-DEF
 'laa taysdlə-sgaayaan ?wan suu-ga.
 3 bring-to.centre[EVD_COMP] they say-NONPAST
 ' … and he brought out the gear with which he used to fish' (Swanton
 1901: 103 [Enrico 2003: 1290]) = (87)
- e. *tləgu/tlə* [… NP … V] … 「外の関係」
 tləgu [gandlaay kwahgaayaa-gən-ii] ?aadaagaa-gyaalga-gən.
 how the.water flow[EVD]-PAST-INFO be.different-become[EVD]-PAST
 ' … how the river flowed was different.' = (82)

ところで、3.2で述べたように、譲渡可能所有における再帰所有代名詞 *?an̩ga* 'own NP' は関係節の中に入ることができない。すなわち、下の (92) ((44a) の再掲) において、再帰所有代名詞 *?an̩ga* は、被所有者である *χaagaay* 'the dog' を主要部とする関係節の外に現われる。

- (92) [χaagaay haana-s] ʔaŋga 'laa qiŋ-gən.
 the.dog be.pretty-NONPAST own 3 see-PAST
 'He saw his own pretty dog.' = (44a)

更に、下記の例（それぞれ (68) と (69) の再掲）にみるように、*ʔwaa=dləw=χan* 'all' や *sgwaana* 'one of' といった数量詞も関係節の中に入ることができない。

- (93) [gina=χan dawuŋ-sga] ʔwaa=dləw=χan=ʔuu
 INDF=EMPH be.close-to centre all=FOC
 siŋgyaan t'aləŋ ʔisda-gəŋ-giin-ii.
 backward we bring-HABIT-PAST-INFO
 'We used to bring back all the stuff that was close (to us).' = (68)

- (94) dləw [θ=gii ciina sguga-s-ii] sgwaana
 then into salmon go.up.river-NONPAST-INFO one.of
 dlə-st'a-giŋ-ŋ=dləw 'lə=qada-ŋ=gyaan …
 take.out-to.edge-IMP=when 3=slice-IMP=and
 'Then take out one of the salmon that comes up into it and …' (Swanton
 1905: 8) = (69)

これら再帰所有代名詞や数量詞が関係節の外に現われるのは、関係節全体が名詞相当の一つの単位をなしているからであると解釈できる。ここでは、このプロセスを「疑似名詞化」、そのプロセスによってできた単位を「擬似的名詞節」と称することにする²²。

このように主要部内在型関係節を疑似的名詞節と捉えたとすると、(91) に示したハイダ語の連体修飾構造は、次のように解釈できる（そのうち e のタイプについては成案を得るに至っていないので、ここでは省略する²³）。

²² 柴谷 (2014) のいう「事態準体言化 event nominalizations」や古代日本語の「準体句」(小田2015) も参照。柴谷 (2014) は、主要部内在型関係節は「項準体言・事態準体言の名詞句用法」であり、節や文ではないとみる。また、先に述べたように、Basilico (1996) は、本稿とは異なるアプローチの仕方ではあるが、主要部内在型関係節を nominalized sentence と見做している。

²³ *tləgu* 'way, how' や *tlə* 'place, where' は、先に述べたように、間接疑問文において疑問詞として用いられることがある。ハイダ語の疑問文においては、疑問詞が文頭に現われることが多く、これらが連体修飾構造において先頭に現われるのは、そういったことと関係しているのではないかと思われる。従って、この e は d と同じタイプであるとも見做し得る。

(95) ハイダ語における連体修飾構造のタイプの解釈

- a. [… (NP_i) … V] \emptyset_i … 疑似名詞化した [] の中に現われる名詞句 (但し, この名詞句は必ずしも現われるとは限らない。下の b, c, d も同様) とその外の \emptyset 名詞 (顕在化しない) は同一の対象を指示し, 両者が並置されることによって前者が後者を修飾するという関係が生じる。
- b. [… INDF_{i=PP} … V] NP_i … 疑似名詞化した [] の中に現われる不定代名詞は, 場所を示す標識 (=PP で表わす) を伴い, その外の名詞句と同一の対象を指示し, 両者が並置されることによって前者が後者を修飾するという関係が生じる。
- c. [… INDF_i … V] NP_j … 疑似名詞化した [] の中に現われる不定代名詞とその外の名詞は異なる対象を指示し, 両者が並置されることによって前者が後者を修飾するという関係が生じる。但し, 修飾を受ける名詞は, *xaaydagaay* ‘people’ に限られるという点で複合 compound に近い (Enrico 2003 参照)。
- d. [… (NP_i) … V] NP_j … 疑似名詞化した [] の中に現われる名詞とその外の名詞は異なる対象を指示し, 両者が並置されることによって前者が後者を修飾するという関係が生じる。

a のタイプ (つまり, いわゆる「主要部内在型関係節」) において, 顕在化しない名詞 \emptyset を想定するのは, 他のタイプとの平行性を保つためであり, そうすることにより [] が連体修飾の機能を果たすことがより明確になるからである。ここではあえて「 \emptyset 名詞」なるものを想定したが, この点は議論の余地がある (例えば, [] 内における文法役割と主節におけるそれとの関係など)。

(95) に示したように, [] で括られた部分は疑似的名詞節であり, それと他の名詞句が並置されることにより修飾関係が生じると考える。その時, [] に現われる任意の名詞と [] の外の名詞が同一の対象を指示するか否かによってそれぞれのタイプが区別される。従って, 主要部内在型関係節に相当する a のタイプは, 疑似的名詞節と名詞からなる構造であるから, それ全体は付加詞ではないと考える。このような解釈をすることにより, a のタイプも他のタイプと同様, 疑似的名詞節と名詞の並列構造と見做すことができ, ハイダ語における連体修飾構造を統一的に解釈することができるのではないかと考える。

ところで, 亀井・河野・千野編著 (1996) の「体言」の項 (871-872 頁) では, 日本語の体言の特徴として「独立性が非常に強い」(872 頁) ことをあげ, 更に, 性・数・格といった他の語との関係を示す要素が名詞の中に盛り込まれ

る多くの印欧語とは異なり、日本語の体言は「文法的に無色であり、体言と他の語との文法的関係は助詞で示される」(同)と述べている。ハイダ語の名詞も日本語と同様、他の語との関係は、専ら語順や格標識(クリティック)によるところが大きく、その意味でいえば、やはり「無色」である。例えば、

- (96) a. q'aas k'un (pitch pants) 'slicker pants'
 b. ʔagilda=sda (Skidegate=from) 'from Skidegate'

(96a) では2つの名詞 *q'aas* 'pitch' と *k'un* 'pants' が並置されることにより、前者が後者を修飾するという関係が生じている(但し、実際にできあがるのは複合語である)。(95) に示したように、疑似的名詞節と名詞句が並置されることによって修飾関係が生じるとみるのは、この名詞同士の並置によって生じる修飾関係に比することができる。

一方、(96b) は名詞 *ʔagilda* 'Skidegate' に奪格の標識 =*sda* 'from' が付き、全体として副詞句の役割を果たしている。やはり名詞は「無色」であり、それ自体に文法関係を示す要素は含まれていない。その同じクリティックは、下記の例にみるように、副詞節の標識としても用いられ得る (cf. 日本語「スキドゲイトから」と「彼が死んでから」)。

- (97) [ʔlaa=ʔəsiŋ siŋ+gwaʔadən]=sda='uu dii qaaga kigaay ʔisda-gən.
 3=too die[PAST]=from=FOC my uncle the.name take-PAST
 'After he died, my uncle took the name.'

(97) において [] で括った部分と続く節との関係が =*sda* 'from' によって明示されるのは、(96b) において名詞 *ʔagilda* 'Skidegate' と他の語(特に動詞)との関係が =*sda* によって明示されることに比定されるといえる。すなわち、[] が疑似的名詞節であるとすれば、それに =*sda* が付属することによって全体として副詞節的な機能を持つようになったと考えるわけである。

このように、疑似的名詞節という単位を想定することにより、連体修飾構造だけでなく、いわゆる複文構造も一つの平面で捉えられるその可能性をひとまず指摘し、ハイダ語の複文構造については、稿を改めて論じることにした。

略号一覧

ATTR: attributive, CAUS: causative, CL: classifier, COMP: complementizer, DEF: definite, DIS: distributive, DUR: durative, EMPH: emphatic, EVD: evidential, FOC: focus, FUT: future, HABIT: habitual, IMP: imperative, INCEP: inceptive, INDF: indefinite, INFO: information, INTER: interrogative, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, PL: plural, POSS: possessive, PR: present, REFL: reflexive, SG: singular, VBLZ: verbalizer; = clitic; - affix; + compound

参考文献

- Andrews, Avery D. 2007. Relative clauses. In: Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description, Volume II: Complex constructions*, (Second edition): 206–36. Cambridge University Press.
- Basilico, David. 1996. Head position and internally headed relative clauses. *Language* 72 (3): 498–532.
- Dixon, R. M. W. 2004. Adjective classes in typological perspective. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds.), *Adjective classes: A cross-linguistic typology*: 1–49. Oxford University Press.
- Enrico John. (ed.) 1995. *Skidegate Haida myths and histories*. Skidegate: Queen Charlotte Islands Museum Press.
- Enrico, John. 2003. *Haida syntax*. Lincoln: The University of Nebraska Press.
- . 2005. *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks/Juneau: Alaska Native Language Center and Sealaska Heritage Institute.
- 堀 博文 2006. 「ハイダ語の語類について」, 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』 第13号: 15–29. 北海道大学大学院文学研究科.
- . 2013. 「危機言語にみる変異と変化—ハイダ語 (北米先住民諸語) の場合」, 『明海日本語』 18: 75–97. 明海大学日本語学会.
- Hori, Hirofumi. 2016. “Polysynthesis” in Haida. In: Kurebito, Tokusu (ed.), *Linguistic typology of the North* 3: 23–57. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 1996. 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂.
- Keenan, Edward L. 1985. Relative clauses. In: Timothy Shopen (ed.), *Language*

- typology and syntactic description, Volume II: Complex constructions*: 141–70. Cambridge University Press.
- and Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63–99.
- Levine, Robert D. 1977. The Skidegate dialect of Haida. Ph. D. dissertation, Columbia University.
- 小田勝 2015. 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院.
- 柴谷方良 2014. 「関係節再考」(2014年11月7日東京外国語大学における講演会の資料)
- Swanton, John R. 1901. Haida texts (unpublished ms. 30 [N1.5]) Philadelphia: The Library of the American Philosophical Society.
- . 1905. *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. Bureau of American Ethnology, Bulletin 29. Washington, D. C.: Government Printing Office.
- . 1911. Haida. In: Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian languages, Part 1* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 40): 205–82. Washington, D. C.: Government Printing Office.
- 寺村秀夫 1975. 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」, 『日本語・日本文化』4号, 大阪外国語大学留学生別科; 寺村秀夫 1993. 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編一』: 157–207, くろしお出版に再録.
- Williamson, Janis. 1987. An indefiniteness restriction on relative clauses in Lakhota. In: Eric Reuland and Alice G. B. ter Meulen (eds.), *The representation of (in)definiteness*: 168–90. Cambridge, MA: MIT Press.
- 吉村紀子 2002. 「主要部内在型関係節の構造—方言研究からの一考察」, 『ことばと文化』5: 133–146, 静岡県立大学英米文化研究室.

* ハイダ語のデータをご提供くださった話者は次の方々である (イニシャルと生(没)年、男女 [m/f] の別のみ記す)。JC (1924, f), BH (1928, f), RJ (1924, m), DM (1929–2017, f), NP (1926–2012, m), RJ (1924, m), ER (1921–2010, f), EW (1913–2009, m), JW (1921–2008, m), SW (1923, f), JY (1923–2008, m)。
Dii gi tllgiidan sgawdagi dalng ga hll kil'laaga. Haw'a!

* 本稿は日本学術振興会科学研究費(基盤研究(C))「ハイダ語の形態統語法と構造的変化に関する総合的研究」(研究代表者:堀 博文, 課題番号:16K02663)による研究成果の一部である。